枕草子と説話

高橋　貢

枕草子には物尽しの段、作者の体験を記した段等があるが、それらの中に説話を記した段や含んだ段があって、枕草子に変化と色どりをそえている。

説話の種類は従来、大きく神話、伝説、昔話、世間話に分けられている。ところで、ここでは便宜上、昔から伝えられている様々の話を仮りに故事としてまとめると、枕草子でとり上げている主な説話は平安貴族に関した世間話と、日本・中国の故事である。これらのうち、世間話は話全体を記しているが、故事は歌・会話の中にこなされて使用している。言いかえると、故事をこなした上で話し、問答し、歌によみこんでいる。―なお故事は成句のように形ができている場合があり、当時の貴族にとっては常識であった。また故事は全部が説話とは言えないわけで、故事の中に説話が含まれている。その説話の部分をここで特にとり上げて問題とする。

一、世間話の例

二十三段(注1)「清涼殿の丑寅のすみ」は左の二話からなる。

一、天皇が女房達に白い色紙をたたんで、「これに、ただいまおばえんふるきことひとつづつ書け」と仰せられると、清少納言は「年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をしみればもの思ひもなし」という歌の「花」を「君」に書き改めて差し出した。それを天皇が見て、次の話をされた。

円融院の時に、院が殿上人に「草子に歌一首書け」と命じた。関白道隆は三位中将の時であったが、「しほのみついつもの浦のいつもいつも君をばふかく思ふはやわが」という古歌の末の句を「たのむはやわが」と改めて書くと、院は大層ほめた。

二、中宮が古今集の草子を前に置いて、歌の上の句を中宮が言って、その下の句を女房に言わせたところ、女房はなか〳〵できなかった。その時中宮は次の話をした。

村上天皇の時代に、宣耀殿の女御芳子がまだ姫君の時、父師尹が第一に習字を習え、第二に琴を習え、第三に古今集の歌を暗誦せよと教えていた。天皇は物忌の日に「その月、なにのをり、その人のよみたる歌はいかに」と女御にたずねると、女御は一言半句も間違わないで暗誦した。

後者の話は大鏡「左大臣師尹」伝に採録されている。(注2)

一〇三段「雨のうちはへ降るころ」に左の話を記す。

天皇の使として式部丞信経が来たので、清少納言が褥を出した。すると、褥を押しのけて坐った。清少納言がそのわけを聞くと、雨が降っているので、足型がついてよごれるからと言った。清少納言は「など。せんぞく料にこそならめ」としゃれを言うと、信経は「これは、御前にかしこう仰せらるるにあらず。信経が足がたのことを申さざらましかば、えのたまはざらまし」と言った。そのついでに清少納言は信経に次の話をした。

村上天皇の皇后に仕えていた下仕え女にゑぬたきという人がいた。蔵人藤原時柄が「これやこの高名のゑぬたき、などさも見えぬ」と言うと、ゑぬたきは「それは、時がらにさも見ゆるならん」と答えた。この話は秀句として上達部、殿上人に伝えられている。

一一九段「あはれなるもの」に御嶽精進は「なほ、いみじき人と聞ゆれど、こよなくやつれてのみこそまうづと知りたれ。」と記した後に左の話を載せる。

右衛門佐宣孝は「ただきよき衣を着てまうでんに、なでふことかあらん。かならず、よも、あやしうてまうでよと、御嶽さらにのたまはじ」と言って、三月に濃い紫の指貫、白い襖を着て参詣した。人々はあさましがったが、六月に筑前守が死んで、後任になった。

一八二段「村上の前帝の御時に」に左の話を掲載する。

村上天皇が雪を器に盛って、兵衛の蔵人に歌をよめとさし出した時、「雪月花の時」という白氏文集の一句で奏上した。

また同じ人が天皇の側に侍していた時、炭櫃に煙が立った。「かれはなにぞと見よ」と仰せになると、「わたつ海の沖にこがるる物みればあまの釣してかへるなりけり」と奏上した。蛙が飛びこんで焼けているのであった。

右は村上天皇に仕えた才女の逸話であって、世継物語(注3)に引用されている。また「わたつ海の」の歌は藤六集(注3)にもある。

右の話に続いて、一八三段「御形の宣旨の」も女房の逸話を記した一段である。即ち、御形の宣旨が殿上童の形をした美しい人形を天皇にさし上げて、「ともあきらの大君」と名づけたのを、天皇が興じた話である。

二四四段「蟻通の明神」は左の話を掲載する。

昔、天皇は四十歳以上の人を殺した。中将に七十近い親がいたが、孝心深い人なので、家に土を掘って親をかくしておいた。ある時唐土の帝がこの国を討ちとろうとして難題を送って来た。問題は三通りあった。

一、丸く削った木の本末を尋ねる問題。

二、同じ長さの蛇の雌雄を判別させる問題。

三、七曲にまがった玉にひもを通させる問題。

人々はこの問題を解きわずらった。中将は家に帰って親に聞き、問題を問いた。天皇は中将の親を都に住まわせることを許した。

枕草子ではこの話を日本の話としているが、元来、雑宝蔵経巻一、法苑珠林巻四十九、賢愚経巻七等にあって、印度の話である。日本の説話集では打聞集第七「老者移ニ他国一事」、今昔物語集巻五第

三十二「七十余人流遣他国国語」に収める。

右の話は、形式は「昔」から始まり、「人の語りし」で結ぶ、昔語りの形をとっている。また要素について言うと、大和物語一五六[注4]段「をばすて山」の話と通じる棄老・養老説話の一つであり、竹取物語や江談抄巻三「吉備入唐間事」と通じる難題話の一つでもある。

三〇七、三〇八、三〇九の三段に平安時代の人々の逸話を掲載する。

三〇七段「右衛門の尉なりける者」は、右衛門の尉某がえせなる父親を伊豫国から上京する時に、海に落とした。七月十五日に盂蘭盆の準備をしているのを見て、道命阿闍梨は「わたつ海に親おし入れてこの主の盆する見るぞあはれなりける」とよんだ。

右の話は古本説話集巻上第十五「道命阿闍梨の事」[注5]に引用されている。

三〇八段「小原の殿の御母上」は、人々が普門寺で法華八講を行ない、翌日、小野殿に集まって音楽の遊びをし、漢詩を作った時に、小原の殿の母上（拾遺集には春宮大夫道綱母とある）が「薪こることは昨日に尽きにしをいざ斧の柄はここに朽たさん」とよんだ。この話に続いて「ここもとは打聞になりぬるなめり」と注を記す。

右の歌は拾遺集巻二十哀傷、道綱母集、蜻蛉日記にあり、また世継物語に引用されている。

三〇九段「また、業平の中将のもとに」は、業平中将の許に母から「いよいよ見まく」の歌が送られて来たという伊勢物語、古今集巻十七所収の話を簡略に記し、「いみじうあはれにをかし」と評している。

二、日本の故事の例

世間話と故事とをどこで区別するかは困難である。神話や外国の話等、古い時代や遠い外国の話ならば世間話と一応区別してもよい。しかし必ずしもそうとは言えない場合もある。ここではおおざっぱに、まとまった話としてではなく、成句や諺になっている場合、及び話を簡略化して一、二行程度にまとめ、それを随想や他の話の中の一要素としている短文、記事を故事としてとり上げる。世間話としてとり上げた話の中に、故事に入れてよいのがあることはもちろんのことである。

三十八段「池は」に、猿沢の池に采女が身投げしたのを柿本人麿が歌によんだ故事を、左のように引用している。

「猿沢の池は、采女の身投げたるをきこしめして、行幸などありけんこそ、いみじうめでたけれ。『ねくたれ髪を』と人丸がよみけん程など思ふに、いふもおろかなり。」

右の故事は大和物語一五〇段、拾遺集巻二十哀傷、七大寺巡礼私記「興福寺」[注7]条にある。大和物語と七大寺巡礼私記所収話とは話が違っている。大和物語の話は、采女が帝に一度召されたのを悲しんで、猿沢の池に身投げし

た。帝は後にそのことを聞いて池のほとりに行幸し、人々に歌をよませた。柿本人麿は「わぎもこのねくたれ髪を猿沢の池の玉藻とみるぞかなしき」とよんだ。

七大寺巡礼私記所収の話は、平城天皇と淳和天皇と合戦の時、平城天皇が帝位を捨てたので、后は猿沢池に身を投げた。天皇は悲しんで「ワキモコカ」の歌をよんだ。この話の始めに「世人伝云」とあるので、この話は口伝えに語られていたものと思う。

四十段「花の木ならぬは」に、素盞嗚尊が出雲国に行ったことを思って柿本人麿が歌によんだ故事を引用する。左の通りである。

「白樫といふものは、（中略）いずくともなく雪のふりおきたるに見まがへられ、素盞嗚尊出雲の国におはしける御ことを思ひて、人丸がよみたる歌などを思ふに、いみじくあはれなり。」

諸先学の方々によって指摘されているように、右の人麿の歌の出典は万葉集巻十所収の「あしひきの山道も知らず白檀の枝もとををに雪の降れれば」で、同歌は拾遺集巻第四冬にもとられている。この歌は素盞嗚尊とは無関係であるが、平安時代に枕草子に記されているような伝説があったのかもしれない。

なお「桐火桶」には「万葉のなかのしかるべきさまのうた」の一つにこの歌を上げている。

六十二段「河は」に左の如く、在原業平の故事を引用する。

「天の川原、『たなばたつめに宿からん』と、業平がよみたるもをかし。」

この話の典拠は古今集巻九羇旅歌、伊勢物語所収の業平の歌「かりくらしたなばたつめにやどからんあまのかはらに我はきにけり」である。

一六一段「故殿の御服のころ」、一八四段「宮にはじめてまゐりたるころ」に、葛城の神の故事を引用する。即ち一六一段では宰相中将斉信に「葛城の神、いまぞずちなき」と言わせている。一八四段では、清少納言が新参として中宮御所に出仕した時、暁になって早く下局に退出したいと思っていると、中宮が「葛城の神もしばし」と仰せになる。

葛城の一言主神が昼間顔を見せなかった話は日本霊異記巻上第二十八「修二持孔雀王咒法一得二異験力一以現作レ仙飛レ天縁」、三宝絵詞、今昔物語集巻十一第三「役優婆塞、誦持呪駈鬼神語」等、様々の作品にとり上げられており、平安時代の人々にとって常識的な話であった。

二七七段「御前にて人々とも」に、姨捨山の月の故事を引用する。即ち、清少納言が「腹立たしい時、真白な紙を手に入れた時や、青々とした畳を見た時は命が延びる気がする。」と言うと、中宮は「いみじくはかなきことにもなぐさむるなるかな。姨捨山の月は、いかなる人の見けるにか」と仰せになる。この故事の典拠は古今集巻十七雑上、大和物語一五六段、今昔物語集巻三十所収話の「わが心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月をみて」の歌である。

三、中国の故事の例

中国の故事については「斧の柄」「朱買臣」の故事等が用いられているが、すでに矢作武氏[注8]等の論文があるので、ここでは一、二指摘するだけにとどめる。

三十七段「木の花」中の梨の花の条に楊貴妃の故事を引用する。即ち「楊貴妃の帝の御使にあひて泣きける顔に似せて、『梨花一枝春、雨を帯びたり』などいひたるは、おぼろげならじとおもふに、なほいみじうめでたきことは、たぐひあらじとおぼえたり。」

一三六段「頭の弁の」に孟嘗君の故事を引用して、頭の弁藤原行成と問答する。即ち「つとめて、蔵人所の紙屋紙ひき重ねて、『けふは残りおほかる心地なんする。夜を通して、昔物語もきこえあかさんとせしを、にはとりの声に催されてなん』と、いみじうことおほく書き給へる、いとめでたし。御返しに、『いと夜ふかく侍りける鳥の声は、孟嘗君のにや』ときこえたれば、たちかへり、『孟嘗君のにはとりは、函谷関を開きて、三千の客わづかに去れりとあれども、これは逢坂の関なり』（以下省略）」

四、体験を記した段

説話ではなく、清少納言の体験を記しているが、後の説話集に引用されている段がある。

一〇六段「二月つごもり頃に」は、二月下旬に雪がちらついている時に、藤原公任が白氏文集の一句をもじって「すこし春あることこそすれ」と書いて寄越した。その下の句に清少納言は「空さむみ花にまがへてちる雪に」という上の句を付けた。

この段は要約して、古本説話集第十二「清少納言の事」に引用されている。

五、話の伝承経路

右に記したように、枕草子には世間話、日本・中国の故事等の話がある。それではこれらの話をどこから引用し、採録したのかというと、

一、先行作品からの引用。

二、当時の貴族や女房が教養として身につけていた常識的な話や句。

三、打聞き—貴族・女房からの打聞きと、説経僧から話を聞いた場合がある。

右の三つの場合が考えられる。先行作品からの引用について述べると、特に中国の故事の場合、矢作氏の説[注8]によると、清少納言は白氏文集、蒙求、または千字文等の類書を読んでいたというので、枕草子にはそれらからの引用は考えられる。ただたとえ読んでいても、枕草子に引用されている故事が平安時代の貴族に盛んに用いられていなければ、清少納言が使ったり、枕草子に引用することはなかったであろう。事実、「斧の柄」の故事について見ると、歌集（後撰集巻二十、金葉集巻一、新古今集巻十七）、物語（宇津保物語「国譲」下、源氏物語「絵合」「胡蝶」、夜半の寝覚巻二）に用

いられている。このことからこの故事は平安時代に盛んに使用され、常識になっていた故事であるということが分る。日本の故事の場合、万葉集、古今集、伊勢物語、宇津保物語、住吉物語等は枕草子に引用されている（六十八段「集は」、二一二段「物語は」、二九二段「成信の中将は」）ので、これからの引用はあったであろう。

打聞きの場合について述べると、特に世間話の場合は打聞きによった場合が多かったと考えられる。例えば三〇八段「小原の殿の御母上とこそは」の話の後に、「ここもとは打聞になりぬるなめり」と記す。他の打聞きに関する資料を枕草子に求めると、左の場合がある。

三十一段「こころゆくもの」に、つれづれなる時、それ程親しくない客が来て、世間話や公私の出来事を語ってくれる時、心ゆく心地がすると記す。―「つれづれなるをりに、いとあまりむつまじうもあらぬまらうどの来て、世の中の物がたり、此の頃あることのをかしきもにくきもあやしきも、これかれにかかりて、おほやけわたくしおぼつかなからず、聞きよきほどにかたりたる、いと心ゆく心地す。

八十二段「頭の中将の」中で、頭中将斉信が清少納言に「蘭省花時錦帳下」という白氏文集の一句を書いて、次の句を続けさせたところ、清少納言は「草のいほりをたれかたづねん」と書いて返事をした。頭中将等はこの下の句に上の句をつけようとしたが、つけわずらって、「行く先も、かならずかたり伝ふべきことなり、などなん、みなさだめし」と記している。

二七六段「うれしきもの」に、貴人の前で女房が集っている時に、貴人が「昔ありける事」「今きこしめし、世にいひける事にもあれ」語らせ給ふと記す。また何かの折、または人と言いかわした歌が評判になって、打聞きなどに書きこまれると記す。

右のように何かの機会に世間話が話されている。これらの話が全部説話とは言えないが、中には説話も含まれていたと考えられる。

打聞きの他の一つの場合として、説経僧から話を聞く機会があったと思われる。

三十三段「説経の講師は顔よき」、三十五段「小白河といふ所は」、一三五段「故殿の御ために」に説経僧の記事がある。枕草子に登場する代表的な説経僧に清範がいる。清範の能説ぶりは「朝座の講師清範、高座のうへも光りみちたる心地して、いみじうぞあるや。」（三十五段）、「清範、講師にて、説くこと、はたいとかなしければ、ことにもののあはれ深かるまじきわかき人々、みな泣くめり。」（一三五段）と記されている。清範の能説ぶりは続本朝往生伝（「一条天皇」条）、今昔物語集巻十三第四十三、大鏡「道長」伝にあるが、このような説経僧によって説話が語られた可能性がある。(注9)

以上、枕草子に記された説話をとり上げたわけであるが、これらの説話が様々な機会によって清少納言によってとり上げられ、枕草子に記されたことを述べたわけである。

注1、枕草子は日本古典文学大系によった。

2、「古今うかべ給へりときかせたまひて、みかど、こゝろみに本をかくして、女御にはみせさせ給はで、『やまと哥は』とあるをはじめにて、まづの句のことばをおほせられつゝ、とはせたまひけるに、いひたがへたまふ事、詞にても哥にても、なかりけり。かゝる事なむと、父おとゞはきゝたまひて、御装束して、手洗などして、所々に誦経などし、念じいりてぞおはしける。」（大鏡「左大臣師尹」―日本古典文学大系による）

3、「今は昔。村上の先帝の御時。雪のいとたかう降たりけるを。やうきにもらせ給て。梅の花をかさゝせたまひて。月のいとあかきに是に歌よめ。いかゝはいふへきと。兵衛の蔵人に給はせ給ひけれは。雪の花と奏たりけれは。いみしうめてさせ給ひけり。歌なとよむは世のつね也。折にあひたる事。いひかたけれとそおほせられけれ。同人殿上人のさふらはさりけるほと。すひつに煙たちけれは。何とそ見てこと。おほせられけれは。

渡つ海の興にこかるゝ物みれはあまの釣して帰る也けり

此兵衛のせう。たそとよ名をしらす。」（世継物語―群書類従）

「かへるのおきにいてゝ

わたつうみのおきにこかるゝものみれはあまのつりしてかへるなりけり」（藤六集―桂宮本叢書）

4、大和物語の段数は日本古典文学大系によった。

5、「今は昔、右衛門尉なりけるものの、えせなる親を持ちて、人見る、面伏せなりとて、伊豫の国より上りけるが、海に親を落し入れてけるを、人心憂がりあさましがりけるに、七月十五日に、盆をたてまつるとて、いそぐを見たまひて、道命阿闍梨、

わたつうみに親おとしいれてこのぬしの盆する見るぞあはれなりける」（古本説話集―日本古典全書による）

6、「為雅朝臣普門寺にて経供養し侍て、又の日これかれもろともに帰り侍けるついでに、小野にまかりて侍けるに花おもしろかりければ　　春宮大夫道綱母

たき木こることはきのふにつきにしをいざをのゝえはこゝにくださん」（拾遺集―八代集全註による）

「今は昔。時の殿のはゝ上に門寺といふてらにおはしけるを聞て。又の日をの殿に人いとおほくあつまりて。あそひしに侍りける。

薪こる事は昨日につきにしをけふ斧のゑをこゝに朽さんとよみ給ひたるこそ。いとめてたけれ。」（世継物語）

7、「猿沢池、件池在二興福寺南大門之前一、世人伝云、平城天皇与二淳和天皇一合戦之時、平城天皇之后自投二彼池一溺死給云々、（中略）発二謀叛一相攻之日、平城天皇忽出二九重之宮一永捨二万乗之位一、因レ茲皇后投二件池一溺死、天皇見レ之有二悲哀御詠一、其詞云、

ワキモコカ子クタレカミヲサルサハノイケノモクツトミル

ソカナシキ」（七大寺巡礼私記―雑誌「建築史」所収の本文による）

8、矢作武氏「清少納言の漢才と古本蒙求」（早稲田大学「国文学研究」昭和四十一年十月）

9、説経僧が説話を持っていたことに関しては「説経師と説話」（早稲田大学「国文学研究」昭和四十年三月）を御参照下さい。